

大学生の運動部活動への参加動機についての研究

小栗 優貴¹⁾・菊池 秀夫

Student Motivation to Participate in College Athletic Association Activities

Yuki OGURI, Hideo KIKUCHI

Abstract

This study aims to understand and assess the motivation structure for college students participating in intercollegiate athletic programs. The study also seeks to examine the 7-factor structure model regarding student motivation suggested by the pertinent previous studies such as Yamamoto (1990), Kuramoto and Kikuchi (2006), Kikuchi and Kuramoto (2007), and so on. Data for the study were obtained via an online questionnaire survey of 306 students belonging to college athletic teams at a university (C university) in Aichi Prefecture. Major results of the study include: (1) Factor analysis of motivation to participate in the intercollegiate teams revealed seven factors. The cumulative percentage of the contribution of the extracted factors was 69.7%. These seven factors were named “affinity,” “freedom,” “health and physical fitness,” “achievement,” “adherence,” “avoidance,” and “social usefulness,” respectively. The resulting factor structure was quite consistent with those reported in previous studies investigating student motivation. (2) Factor scores of the student motivation were calculated and compared to see if differences exist between the obtained motivation structure and personal attributes to reveal statistically significant differences: “achievement” and “avoidance” factors for gender differences, “affinity” and “adherence” factors for grade differences, and “social usefulness” for differences in students’ major. (3) Factor scores of the motivation were also examined in terms of two pertinent groups (group sports vs. individual sports), to reveal statistically significant differences for two of seven factors “affinity” and “freedom.” Implications of those results and suggestions for future research are discussed.

1. 目的

大学における運動部活動の意義について、金森・蛭田(2018)は、競技スポーツや部活動を通して人格の陶冶がなされ、運動部活動だからこそ得られる人間関係もあると述べている。また公益社団法人全国大学体育連合が全国の大学110校を対象に実施した調査では、多くの大学がクラブ活動に対する期待として、「人間的成

長やリーダー養成」「学生生活の充実」を挙げている(公益社団法人全国大学体育連合, 2016)。このような現状を踏まえると、大学生の運動部活動への参加動機を把握することは、社会への人材輩出に繋がる「部活動」という場に関して重要な示唆を与えてくれるものと思われる。また同時に、学生たちのより充実した学生生活を考えるうえでの手がかりが得られるものと考えられる。そこで本研究では、大学生の運動部活

¹⁾元大学院体育学研究科修士課程

動への参加動機について検討することにした。具体的には、先行研究（山本，1991；蔵本・菊池，2006）が提案する大学生の組織スポーツへの参加動機構造を参考にして、以下の3点を目的とした。

- ① 大学生の運動部活動への参加動機構造を把握する
- ② 得られた参加動機構造と個人的属性との関連について検証する
- ③ 得られた参加動機構造と競技特性との関連について検証する

2. 先行研究

日本国内におけるスポーツへの参加動機に関する研究は大きく2つに分けることができる（山本，1990）。ひとつは、一般的なスポーツ参加の動機を対象としたもので、人々がスポーツ活動に参加する理由を明らかにしようとした研究である。もう一つはスポーツ集団への参加動機や所属動機についての研究である。本研究は後者に分類される。

スポーツ集団への参加や所属動機について、山本（1990）は大学生の運動部参加に着目し、どのような動機が関与しているか因子構造の次元から明らかにし、その違いを正選手と補欠選手で比較している。また山本（1991）は、体育学部所属学生218名を対象に山本（1990）が実施した研究と同様の調査を行い、対象学生の参加動機が7因子構造（親和、自由、健康・体力、達成、固執、回避、社会的有用性）であることを再確認している。更に山本（1992）は九州地区大学体育大会の参加者1,837名を対象に、彼らの運動部への参加動機を比較・検証しており、そこにおいても7つの動機側面から構成されることを確認している。

山本の一連の研究に基づいて蔵本・菊池（2006）の研究がある。蔵本・菊池（2006）は山本（1990）の研究で明らかにされた参加動機の7要因（親和、自由、健康・体力、達成、固執、回避、社会的有用性）について、28の質問項目を作成した。その上で大学体育会所属の運動部

学生231名とスポーツサークルに所属する学生を対象としてスポーツ活動への参加動機について検討し、山本の7因子構造モデルと同様の参加動機構造を確認している。

さらに菊池・蔵本（2007）は、蔵本・菊池（2006）の研究で得られた大学生の組織スポーツへの参加動機について検証的因子分析を実施することにより、7因子構造の安定性を再確認している。また、山本の7因子構造モデルをより少ない質問項目から構成する7因子21項目モデルを提案し、回答者にとってより負担の少ない測定方法（質問紙）の可能性を示している。

近年では杉山による研究（2017）がある。スポーツ推薦入学者が少ない国立大学の運動部学生を対象に、種目を10種目に拡大し、山本（1990）の研究方法に沿った形で研究を行っている。結果として6因子（回避、達成目標と帰属、健康・体力、成功と地位、社会的有用性、自由）を抽出し、正選手と補欠選手間の動機の違いについて確認している。得られた因子構造が山本（1990）の7因子構造と微妙に異なった点については、スポーツ推薦入学者の少ない大学を対象としたためではないかと考察を行っている。

以上のように、大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究は山本（1990）の研究をベースに、いくつかの研究が行われてきた。動機づけ研究の目指す先は「特定の場面における人間の行動の理解とその制御」である。行動生起のメカニズムを理解することは、スポーツ組織等の集団を統率する上で非常に重要なことである。大学運動部という特殊な環境で、学生の活動意欲や動機に目を向けることは単に学術的な面からのみならず、学生への効果的な支援という実践面にもつながることが期待される。

3. 研究方法

（1）データの収集

研究対象：愛知県内C大学の体育会運動部に所属する2～4年次学生を対象とした。入学後にオンライン授業が主となり、体育会活動が制限されたことから、1年次学生は調査対象から外

した。部員数や競技歴（大学から始める学生が多い競技と高校生以前から取り組んでいる競技を比較することができるよう）を考慮して8種目8クラブを対象とした。

調査方法：学生の行動様式等を考慮して、Webアンケート（電子媒体）での調査（無記名式）を実施した。対象者はスマートフォンでアンケートに回答できる形式で、回答（データ）が蓄積されるサーバーの監視を常時行っている民間業者のサービスを利用した。

調査項目：本研究の目的に沿って、対象者の基本属性に関する項目（所属クラブ、競技種目、学年、学部、性別、競技歴、組織内での役割、部活動に対する満足度、学生生活全般に対する満足度、入学時入試方式）を作成した。参加動機の項目については、山本（1990）の研究を参考に蔵本・菊池（2006）が作成した組織スポーツへの参加動機に関する7因子28項目の質問項目（「親和」「自由」「健康・体力」「達成」「固執」「回避」「社会的有用性」）を使用した。文言の修正が必要だと思われる箇所については、調査票の質問項目作成の基本原則（土屋，2004）に則ったり一部修正した。

予備調査：本調査を実施する前に、作成した質問項目以外に他の動機がないか、修正した設問項目を含め参加動機に関わる各項目に違和感がないか等を尋ねるべく予備調査（実施期間：2020年10月19日～10月31日）を実施した。対象者はC大学体育会運動部の中から硬式野球部に所属する学生10名、陸上競技部10名、水泳部4名、アメリカンフットボール部11名の計37名であった。この予備調査の結果、質問項目の根幹に関わる指摘等はなかったため、調査項目の変更は行わなかった。

本調査：本調査は体育会運動部に所属の2～4年次学生657名を対象として、2020年11月1日～11月14日に実施した。回収数は332、回収率は50.5%であった。尚、非競技者（マネージャー、トレーナー等）22名と5段階評定をすべて同一回答している（信頼性が低いと思われる）4名を除外し、それ以外の306名で分析を行うことにした。

倫理審査：本調査の実施にあたり、予備調査も含め事前にC大学に対して「人を対象とする研究に関する倫理審査申請書」を提出し、同大学体育学研究科倫理審査委員会の承認（承認NO.2020-26）を得た。

（2）データの分析

参加動機変数の数量化：参加動機に関する項目（28項目）については、「全くそう思わない」から、「あまりそう思わない」、「どちらでもない」、「少しそう思う」、「とてもそう思う」のワーディングを配置した5段階尺度を用い、それぞれ順に1から5までの数値をあたえて数量化を行い、間隔尺度を構成するものと仮定した。

参加動機の構造把握：因子分析（探索的因子分析）を行い、抽出された各因子の解釈と命名を行った。参加動機28項目について相関行列（28×28）を求め、主因子法によって固有値が1.0以上の因子を抽出した。また抽出した因子をバリマックス回転させ、その上で因子負荷量を基準に並び替え、参加動機変数との関連を検討し各因子の解釈・命名を行った。得られた因子構造の安定性の確認については信頼性係数クロンバック α 値を算出した。

参加動機の比較：因子分析の結果から因子得点を算出し、性別、学年別、在籍学部別にその平均値を比較した。また競技特性については、所属運動部を団体競技と個人競技の2つのグループに分類し、グループ間での比較を実施した。

データ処理：本研究におけるデータ処理と分析には統計解析パッケージSPSS (Ver.23)を用いた。また、すべての分析において有意水準（危険率）は5%とした。

4. 結果

（1）調査対象者の属性

調査対象はC大学の体育会運動部（アルティメット部、アメリカンフットボール部、硬式野球部、サッカー部男子、水泳部、スケート部、ラクロス部、陸上競技部）に所属している2～4年次学生657名であった。アンケートの回収数は332件で、回収率は50.5%であった。個人的

属性について、学年別の割合は、2年次学生が48.4%、3年次学生が32.4%、4年次学生19.3%であった。性別は、男性が79.1%、女性が20.9%となり、男性の方が多かった。所属学部については、スポーツ科学部に所属している学生が80.7%、スポーツ科学部以外の学部に所属している学生が19.3%であった。

(2) 参加動機の因子構造

参加動機の28項目について相関行列(28×28)を求め、主因子法によって固有値が1.0以上の因子を抽出した。その結果、7つの因子を確認することができた。これら7因子の累積寄与率は69.7%で、参加動機28項目の全分散の7割をこれら7因子で説明できる結果となった。これ

は、蔵本・菊池(2006)と同様の結果であった。表1は、これら7因子についてバリマックス回転を行い、寄与率の高い因子から順に整理したものである。それぞれの因子については、括られた項目との関係性を考慮して、順に(1)親和、(2)健康・体力、(3)達成、(4)自由、(5)固執、(6)回避、(7)社会的有用性と命名した。

抽出された各因子の安定性を確認するため、信頼性係数であるクロンバックの α 係数を算出した。その結果、「親和」因子が.91、「健康・体力」因子が.87、「達成」因子.83、「自由」因子.79、「固執」因子.78、「回避」因子.75、「社会的有用性」因子.62の α 値が得られた。一般的に α 値.70が基準として知られている。第7因

表1 バリマックス回転後の因子負荷行列および各因子の固有値・寄与率・累積寄与率

項目	バリマックス回転後の因子負荷行列						
	1 親和	2 健康・体力	3 達成	4 自由	5 固執	6 回避	7 社会的有用性
Q16 続いていると多くの友人ができるから	.81	.29	.04	.13	.12	.11	.15
Q14 部活動を通じて一生の友を得たいから	.77	.11	.13	.07	.17	.09	.22
Q15 日常生活で困ったときに助けてくれる仲間がいるから	.77	.21	.15	.19	.14	.06	.23
Q18 続いていると、チームメイトとの関係が良好でいられるから	.76	.22	.06	.14	.11	.19	.01
Q17 仲間と楽しくスポーツをしたいから	.75	.20	.13	.08	.17	.06	-.01
Q20 続いていると、指導者との関係が良好でいられるから	.40	.26	.11	.26	.13	.35	.16
Q11 体力をつけたいから	.17	.83	.05	.09	.06	.11	.10
Q10 健康の増進のために運動したいから	.19	.74	-.02	.10	.17	.16	.01
Q12 常に体を動かしていたいから	.32	.73	.15	.08	.14	.01	.10
Q13 日常生活でたまったストレスを発散させたいから	.25	.62	.09	.23	.10	.20	.06
Q23 部の代表(レギュラー)として公式試合に出場したいから	.17	.02	.87	.03	.04	-.08	.11
Q25 少しでもうまくなりたいから	.09	.06	.78	.18	.09	-.15	.14
Q22 今後も自分の技術や記録が向上するという望みがあるから	-.01	.04	.66	.13	-.01	-.13	.20
Q24 自分の能力を他人に認めてもらいたいから	.18	.12	.59	.20	.15	.17	.03
Q28 チームの雰囲気自由だから	.20	.13	.01	.77	.16	.03	.00
Q27 誰もが平等に練習できるから	.13	.05	.23	.62	.07	.05	.14
Q26 練習をおしつけられず、自主的に取り組めるから	.12	.03	.32	.62	.04	-.05	.12
Q29 厳しい規則などがないから	-.02	.21	.00	.57	.12	.09	-.05
Q33 所属していることを誇りにできるチームだから	.24	.02	.16	.47	.32	.04	.28
Q31 最後まで続けたという満足感を味わいたいから	.23	.22	.07	.18	.81	.11	.01
Q30 部活動を最後まで続けることが目標だから	.17	.09	.14	.18	.75	.06	.03
Q32 やめたという挫折感を味わいたくないから	.13	.17	-.01	.19	.48	.44	.03
Q34 続いていると就職に有利だから	.25	.23	.01	.06	.34	.22	.11
Q21 続けないと、他人に意志の弱い人間だと思われそうで嫌だから	.13	.10	-.02	.03	.13	.77	.00
Q19 やめるとチームメイトに引け目を感じそうだから	.10	.17	-.26	.00	.05	.73	.04
Q37 スポーツをしていると実社会に出てからも役立つと思うから	.33	.11	.24	.03	.22	-.04	.62
Q36 将来、スポーツに関わる職業に就きたいから	.06	.11	.14	.08	-.08	.08	.47
Q35 スポーツを通して貴重な経験をしたいから	.36	-.04	.26	.19	.30	-.05	.43
固有値	8.7	3.3	2.0	1.7	1.4	1.3	1.1
寄与率(%)	31.0	11.7	7.3	6.1	5.1	4.6	3.9
累積寄与率(%)	31.0	42.7	49.9	56.0	61.2	65.8	69.7

子（社会的有用性）の値（.62）が若干下回ったものの、他の因子は全て.70以上であり、全体としては安定した因子構造となっている。また、得られた参加動機の構造は、山本（1991）や蔵本・菊池（2006）らの報告とほぼ同様のものであることも確認することができた。

（3）参加動機のクロス分析(対象者の属性および競技特性との関連)

次に得られた参加動機構造を回答者の属性と競技特性の面から比較を行った。因子分析の結果をもとに回答者それぞれに因子得点を算出し、属性（性別、学年、学部）と競技特性（個人競技・団体競技）間を比較した。

性別で因子得点を比較した結果を表2に示した。「達成」因子と「回避」因子について、それぞれ有意差がみられた。「達成」因子については、男性（.09）が女性（-.34）よりも因子得点が高く、男性の方がパフォーマンス向上やレギュラーとして公式大会への出場、また試合での活躍といった要素が、部活動への参加動機により強く関与していることが明らかとなった。

一方「回避」因子については、男性（-.05）よりも女性（.20）で因子得点が高くなった。女性は部活動を辞めた場合にチームメイトとの今後の関係がどうなるのか、周りからどのように見られるのか等のリスク回避の要素が参加動機により強く関与していることが分かった。

表3は学年別に因子得点を比較した結果である。「親和」因子と「固執」因子について、それぞれ有意差が見られた。「親和」因子については、2年次学生が（-.14）、3年次学生が（.07）、4年次学生が（.22）と学年が上がるにつれて強く関与していることが分かった。「固執」因子についても同様に、2年次学生が（-.16）、3年次学生が（.13）、4年次学生が（.18）と学年が上がるにつれて強く関与していることが分かった。

続いて対象者の在籍する学部をスポーツ科学部とスポーツ科学部以外の2グループに分類し、因子得点を比較した（表4）。有意差が確認されたのは「社会的有用性」因子のみであった。スポーツ科学部生が（.10）でスポーツ科学部以外の学部生は（-.40）とスポーツ科学部生の方が

表2 性別による因子得点の比較

因子	性別		t 値
	男 (n=242)	女 (n=64)	
(親和)	0.01	-0.06	0.53
(健康・体力)	-0.04	0.15	-1.42
(達成)	0.09	-0.34	3.37*
(自由)	-0.05	0.18	-1.84
(固執)	-0.02	0.08	-0.84
(回避)	-0.05	0.20	-2.07*
(社会的有用性)	0.02	-0.07	0.81

注：*P<.05

表3 学年による因子得点の比較

因子	学年			F 値
	2年 (n=148)	3年 (n=99)	4年 (n=59)	
(親和)	-0.14	0.07	0.22	3.51*
(健康・体力)	0.12	-0.12	-0.10	2.53
(達成)	-0.05	0.06	0.02	0.43
(自由)	0.04	-0.06	0.01	0.39
(固執)	-0.16	0.13	0.18	4.40*
(回避)	0.04	0.07	-0.21	2.17
(社会的有用性)	-0.01	-0.01	0.03	0.07

注：*P<.05

表4 学部による因子得点の比較

因子	在籍学部		t 値
	スポーツ科学部 (n=247)	スポーツ科学部以外 (n=59)	
(親和)	0.00	0.01	-0.11
(健康・体力)	-0.02	0.09	-0.80
(達成)	0.02	-0.08	0.69
(自由)	-0.03	0.14	-1.36
(固執)	-0.01	0.03	-0.25
(回避)	-0.03	0.12	-1.19
(社会的有用性)	0.10	-0.40	4.48*

注：*P<.05

表5 競技特性（団体競技と個人競技）別の因子得点の比較

因子	所属運動部		t 値
	団体競技 (n=226)	個人競技 (n=80)	
(親和)	0.11	-0.32	3.60*
(健康・体力)	0.01	-0.02	0.17
(達成)	-0.01	0.02	-0.25
(自由)	-0.11	0.32	-3.85*
(固執)	0.03	-0.08	0.90
(回避)	-0.02	0.06	-0.76
(社会的有用性)	0.01	-0.04	0.47

注：*P<.05

強く関与していることが分かった。

競技特性については、所属運動部を個人競技と団体競技の2グループに分類することにより把握した。その際、個人競技を公式大会に個人で出場できる競技とし「水泳」「スケート」「陸上競技」の3クラブとした。団体競技は公式大会に個人出場できない競技とし、「アメリカンフットボール」「アルティメット」「硬式野球」「サッカー」「ラクロス」の5クラブとした。表5は、これら2グループ間の因子得点を比較したものである。2グループ間で有意差がみられたのは、「親和」因子と「固執」因子であった。「親和」因子については、個人競技が(-.32)に対して団体競技は(.11)となった。団体競技の方が「親和」因子との関わりが強くなっていた。一方「自由」因子については、個人競技が(.32)で、団体競技が(-.11)であり、個人競技の方が「自由」因子と強く関係していた。

5. 考察

(1) 参加動機の構造について

本研究では、大学生の運動部参加動機は、因子寄与率の高いものから順に(1)親和、(2)健康・体力、(3)達成、(4)自由、(5)固執、(6)回避、(7)社会的有用性の7つの因子によって説明されることが明らかとなった。クロンバックの α 係数を算出したところ、殆どの因子で基準値(.70)以上であり、全体として安定した構造であると判断することができた。また、得られた各因子はそれぞれ相応の解釈が可能であると共に、全体としての構造も山本(1990)や蔵本・菊池(2006)の先行研究とほぼ一致するものであった。その意味では、本研究での得られた結果は一定の信頼性と妥当性を有するものと考えることができる。尚、本研究では時代変化等を考慮し、予備調査によって参加動機項目等の精査を行ったが、大きく変える要素は見つからなかった。そのような意味では、先行研究との間には時間的な隔たりはあるものの、大学生の運動部活動の参加動機には大きな変化はみられなかったと判断することができる。

(2) 属性(性別・学年別・在籍学部別)による参加動機の比較

因子得点を性別、学年、所属学部で比較した。まず性別での比較について、「達成」因子と「回避」因子について、それぞれ有意な差がみられた。「達成」因子については、男性の方が女性よりも強く関与していることが分かった。このことから、男性の方がパフォーマンスの向上やレギュラーとして公式大会への出場を目指すこと、また試合での活躍といった要素が、部活動への参加動機に強く関与していることが明らかとなった。

逆に「回避」因子については、女性の方が男性よりも強く関与していた。このことから部活動を辞めた場合にチームメイトとの関係がどうなるか、周りからどのように見られるか等のリスク回避の要素が男性よりも強くはたらいっていることが分かった。女性の方が男性よりもコミュニティや集団の中での自身の位置づけについて意識しているということかもしれない。また、「回避」と「親和」を除くすべての因子(「達成」「健康・体力」「自由・平等性」「固執」「社会的有用性」)で有意差が見られた山本(1992)の研究とは異なる結果となった。山本(1992)の研究から、30年近く時間が経過したことで直接的な比較をすることはできないが、強いて言えば男女の差異が少しずつなくなってきたのかもしれない。性別という観点では、時代要素も含め、さらなる検討の必要性があることが分かった。

次に学年別での比較について、「親和」因子と「固執」因子について、それぞれ有意差が認められ、両因子とも学年が上がるにつれて強い関与がみられた。「親和」因子については、大学生活の進行と共に仲間たちとの関係が強まる様子を伺うことができる。「固執」因子については、学年が上がるにつれ活動への参加意志を強める様子が伺える。仲間との絆が深まったことで、最後までやり切りたいという気持ちが強まっているのかもしれない。「固執」と「親和」の両因子間に、このように論理的にも関係する点がみられるのは興味深い。

在籍学部別での比較について、スポーツ科学部とそれ以外の学生に分類し比較した。有意差がみられたのは「社会的有用性」因子のみであった。スポーツ科学部生はそれ以外の学部の学生よりも、スポーツを通して得られる体験や学びが実社会に役立つと感じており、参加動機に影響を及ぼしていることが推測される。1つの要因として大学の授業の影響もあるのかもしれない。スポーツ科学部の学生は他学部生に比べるとスポーツやスポーツでの経験が社会にどう貢献するのかを学ぶ機会が多い。そのような違いが、このような結果をもたらしているのかもしれない。

(3) 競技特性による参加動機の比較

調査対象とした体育会運動部を「個人競技」「団体競技」の2つのグループに分類した。個人競技は「水泳」「スケート」「陸上競技」の3クラブ、団体競技は「アメリカンフットボール」「アルティメット」「硬式野球」「サッカー」「ラクロス」の5クラブとし、2グループ間で因子得点の平均値を比較した。その結果、有意な差がみられたのは、「親和」因子と「固執」因子であった。「親和」因子は個人競技よりも団体競技の方が強く関係していた。団体競技は個人競技よりもチームとしての成功あるいは集団行動やチームワークの視点を持ち合わせていることが、こうした結果に反映されているのではないかと考えられた。逆に「自由」因子については、団体競技よりも個人競技の方が強く関係していた。個人競技はチームワークよりも個の努力が競技結果と結びつくため、雰囲気の自由さや自主性に重きを置いていることがわかる。以上のように団体競技と個人競技の特性の違いが参加動機にまで強く影響していると考えられる。

6. まとめ

本研究の目的は、今日の大学生の運動部活動への参加動機構造について把握するとともに、個人的属性や競技特性との関連を検証することであった。先行研究による大学生の部活動参加動機モデルを参考にして、愛知県C大学体育会

運動部所属の学生を対象にWebアンケート調査を実施しデータを収集、分析した。主な結果は以下のとおりであった。

まず、部活動への参加動機について7つの因子が抽出できた。これらの因子の累積寄与率は69.7%で、寄与率の高い因子から順に(1)親和、(2)健康・体力、(3)達成、(4)自由、(5)固執、(6)回避、(7)社会的有用性と命名した。ほぼ全ての因子がクロンバックの α 値(.70)を満たしており、全体として安定した因子構造となっていた。これらの結果は先行研究(山本, 1990; 蔵本・菊池, 2006)と大筋で一致するものであり、また今日的な解釈も可能であることから、一定の妥当性があるものと判断することができた。

次に、参加動機と個人的属性との関連について、因子得点を算出して性別、学年別、所属学部で比較したところ、それぞれに有意差が確認された。性別では、「達成」因子と「回避」因子に有意差がみられた。「達成」因子については、男性の方が女性よりも強く関与し、逆に「回避」因子については、女性の方が男性よりも強く関与していた。学年別では、「親和」因子と「固執」因子について、それぞれ有意な差が確認され、両因子とも学年が上がるにつれて強く関与することが明らかとなった。在籍学部別(スポーツ科学部とスポーツ科学部以外の比較)では「社会的有用性」因子のみに有意な差がみられた。スポーツ科学部の学生はそれ以外の学部の学生よりも、スポーツから得られる体験が実社会に役立つと感じており、参加動機に反映されていることが示唆された。所属運動部(競技特性)と参加動機の関連については、「個人競技」「団体競技」の2つのグループ間で比較したが、「親和」因子と「固執」因子に有意な差がみられた。「親和」因子は個人競技よりも団体競技の方が強く関係しており、逆に「自由」因子は団体競技よりも個人競技の方が強く関係していた。団体競技と個人競技の明確な特性の違いが参加動機にまで強く関与していると考えられた。

以上のように、本研究では先行研究に基づいて今日の大学生の運動部活動への参加動機の構

造を把握することができ、更にそれが一定の信頼性と妥当性をもつものであることも確認することができた。特に因子得点を用いたクロス分析（対象者の属性や競技特性と関係）では、十分に解釈可能な結果が得られており、それは参加動機構造の妥当性を裏付けるものとして捉えることができる。本研究と先行研究との時間的な隔りがあることから、筆者らは大学生の参加動機にある程度の変化を予想していたが、大きな変化がないことが本研究の結果から示唆されたと言える。得られた知見は今日の学生運動部活動の理解を深めるものであり、より充実した学生生活への支援につながるものと考えられる。しかしながら一方で、本研究の対象者は体育会運動部所属の学生であり、その多くはスポーツ科学部に在籍する者であったことをここにあらためて確認しておきたい。ある意味では対象者が限定的であったために、大きな変化がみられなかったのかもしれないからである。その点については、更なる検証が必要であることは言うまでもない。また本研究はあくまで1大学の事例に過ぎない。今後は複数の大学を対象にするなど研究対象を拡大して検証を深めていくことが望まれる。

参考文献

- 1) 金森史枝・蛭田秀一：「大学における正課外活動としての体育会運動部活動の意義—体育会運動部活動を通して何を習得しているのか—」, 総合保健体育科学, 41 (1), 45-54, (2018)
- 2) 菊池秀夫・蔵本健太：「大学生の組織スポーツ参加動機の因子構造について」, 中京大学体育研究所紀要, (21), 61-67, (2007)
- 3) 蔵本健太・菊池秀夫：「大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究：体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較」, 中京大学体育学論叢, 47(1), 37-48(2006)
- 4) 公益財団法人全国大学体育連合：「スポーツ・クラブ統括組織と学修支援・キャリア支援に関する調査」, (2016)
- 5) 杉山卓也：「大学運動部に所属する正・補欠選手の参加動機に関する研究」, 静岡大学教育実践総合センター紀要, (26), 111-116, (2017)
- 6) 土屋隆裕：「社会教育調査ハンドブック」, 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター, (2004)
- 7) 山本敦人：「大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較」, 体育学研究, 35 (2), 109-119, (1990)
- 8) 山本敦人：「正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式」, 健康科学(13), 49-58, (1991)
- 9) 山本敦人・金崎良三・南貞乙：「大学体育大会参加者の運動部参加の動機」, 健康科学(14), 25-33, (1992)